

文化

錦川に架かる名橋、錦
 帯橋を幕末に渡った長岡
 藩士河井継之助の旅日記
 「塵盡」(東洋文庫より
 了所収)の一節を紹介す
 ることで、このエッセー
 を終わりにしたい。

安政六(一八五九年
 九月、岩国を訪れた河井

は「領分、家立ち、城市、

家中の様子、如何にも富

めると云う事なり」「地

勢も宜しく、海田等も開

緑地帯

高遠 信次

け、好き所なり」「実に
 山海の利、羨むべき地勢
 なり」と褒めまくり、錦
 帯橋についても「聞きし
 に勝る趣あり」「絶えず
 河井は藩主経幹には何

州にこの戦いは國
 士防衛戦争ながら、戦場
 はほぼ領外であつたとい
 う点が勝因の一つではな
 かつたかと思ふ。なぜ
 なら戰場となつた特にな
 州藩にこの迷惑な
 な戦だつたからである。

幕末の岩国

⑧ 錦川万感

掃除し、妻に踏めは前当
 る様なり」と賛辞を惜し
 まない。

「神が仏が岩国様は扇
 子(しん)の槍の中、岩
 国の民話「小橋踊り」の
 一節である。この「岩国
 様こそ経幹である。」

さらに吉川について
 も、「六万石は陪臣には
 過ぎたれども、元春の功

第39回中国短編文学賞
 (第3席受賞者) 広島市
 二おわり